五輪招致の実態は、甘い見通しと巨額の税金の投入

直ちに中止し、福祉と生活の充実を　(2)

東京都議会議員　福士敬子

前号からのつづき―――

福士「まず、『最初から年に1000億円ずつ積み立てます。』という点、それから『施設なども自前で作れる。』という点です。ただ、基本的な考え方は税金はあまり出さずに、民間からお金をかき集めてそっちを主に出していきますよという計画なんです。」

聞き手「それはオリンピックの『開催そのもの』にかかる経費について、ですね。」

福「そう、招致に失敗すれば施設建設も不必要となる経費であり、そうなればすごくいろいろなことに有効活用できる道も拓かれますね。」

聞「現在進められている『招致活動』に関する経費はどうなっているのでしょうか？」

福「国際オリンピック委員会（IOC）に呼びかけたり、東京にオリンピックが来るようにといろいろ活動するための経費ですが、それも最初は55億円を全体として見込んで、そのうちに東京都が出すのは15億円だけですっていうようなことが、はっきり書かれているんですよね。ところがどんどん違ってきています。東京都の負担は15億円だったはずものが、翌年には31億円、今年2008年度になりますと、38億円使っております。全体では、最初に55億円ですって言っていたお金が、わけのわからない予算も加わって、どんどん膨らんできて、全部で150億円くらいのところに今来ています。」

聞「全体の予算は約3倍になっていますね。」

福「当初の予算の内訳も、実は心もとないものです。38億円の他に『国際スポーツ競技大会への支援事業』として25億円の予算があります。これは何かのスポーツ大会があるときには補助金を出して、その代わりにオリンピックをアピールするというものなのですが、何の大会ではどの程度の補助金が必要で、何人の観客が来て宣伝効果がどの程度のものか、そんなことも考えないであてずっぽうのようです。」

招致委員会の怪

福「38億円の予算の中には、招致委員会の補助というのがあります。」

聞「その招致委員会というのは、招致本部の中の組織ですか？」

福「いいえ、まったく別のモノです。招致本部というのは、東京都の組織であって、東京都職員が担当しているものです。ところが招致委員会というのは、正式には

「特定非営利活動法人東京オリンピック招致委員会」といって、NPO法人であり、東京都とはまったく別の組織です、少なくとも形式上は。」

聞「都とは別の組織で、NPO法人？　じゃあなんで都税から補助金が支払われるのですか？」

福「そう、それが大問題です。都とつかず離れず的な関係になっている。都が担当する方が楽な点については都が担当、お金を集めたり、都が担当するとまずいことは招致委員会に押し付けて、二人三脚でおこなうはずですが‥‥。」

聞「えっ？でもそれは、招致委員会にとっては迷惑千万な話ですよね。どうしてそんなことが通るのでしょうか？」

福「石原東京都知事が、なんとNPO招致委員会の代表にもなっているんです。ですからどうにでもなります。その他には、日本オリンピック委員会（JOC）の皆さんがいらっしゃったりそれから経団連の御手洗さんが入っていたりとか、そういう人たちの委員会です。」

聞「そんな仕組みになっていたんですね。」

福「お金に関しては税金から出せば楽ですからね。招致委員会は独立している法人なんですから、自分で一所懸命にカンパを依頼するなどして、お金を集めてくる、というのが本来の姿なのですが、結局はそれだけじゃ賄い切れないので東京都が招致委員会補助というのを出している。結局税金から出しちゃってるというのが19億円を超えていますね。」

聞「税金から、NPOに対して19億円ですか？」

―――次号につづく

雑　感

シンポジウムに見る、オリンピックの虚しさ

2008年11月14日、「東京オリンピック・パラリンピック招致シンポジウム　日本を元気にする東京オリンピック・パラリンピックを！」が開催されました。基調講演とパネルディスカッションが行われましたが、シンポジウムの常識のひとつ「フロアからの質問受け付け」はありませんでした。すなわち話を一方的に参加者に聞かせるだけ。質問されては困ることがあるのでしょう。基調講演を行った安藤忠雄さん（建築家）は、「東京を緑と森の庭園都市に世界の英知を結集して造る」と述べました。しかしこのことは、オリンピックと関係があるのでしょうか？　むしろオリンピックにかける費用を、そちらに振り向ける方が望ましいはずです。

また４人のパネリストは、国の経済政策とオリンピックを結び付けたい学者、金融と環境とオリンピックを結び付けたい金融専門家、他の２人は報道プレスのオリンピック専門担当記者で、我田引水の内容。途中で帰る参加者は多数。これに虚しさを感じることのできない人々が、オリンピックをやりたがっているのです。(H.H.)